

共翔

第21号



● 目次 ●

[巻頭言] アクティブラーニングの拠点としての大学図書館のあり方 稲葉 英男.....2

[研究ノート] 与謝野晶子12枚の自筆歌稿

(倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」)について 加藤 美奈子.....4

[書物随想] 笑う男 山本 光久.....6

[ブックガイド] 筒井 博之/西垣 優衣/栩本 ゆめ/野田 恵/柴田 歩実/図書館スタッフ

.....9

[ユーザーズガイド]12

[研究室から] ベケット劇公演を通訳して 武部 好子.....14

[利用者へのメッセージ] 一緒に快適空間をつくろう・図書館セミナーのお知らせ.....16



アクティブラーニングの 拠点としての 大学図書館のあり方

就実大学・就実短期大学長 稲葉 英男

高等教育機関への期待

我が国は、急激な少子高齢化の進行、グローバル化による国際競争の激化など社会の急激な変化に直面しており、これらの社会変化に的確に対応できるグローバル且つイノベティブな人材の養成が、高等教育機関である就実大学・就実短期大学に課せられた大きな使命である。将来の予測が困難な現代に生きる学生にとって、大学での学修が次代を生き抜く基盤となるかは切実な問題であり、地域社会や産業界の変化に対応できる有為な人材の育成が求められている。さらに、我が国は同世代の半数以上が大学に進学するユニバーサル化時代を迎えており、学生の意識は多様化し、学修目的の曖昧な学生や動機付けの低い学生の増加そしてデジタルネット時代で成長してきた世代である。このような学生の出現に教員は教育内容や教授法を改善工夫し、学生の興味や関心を抱かせながら、知的活動に導くことに苦慮している。そこで注目を集めているのがアクティブラーニング(学生の主体的・積極的・行動型の学修)である。従来の講義形式の一方向型授業からICT(情報通信)などを利用した学生参加の双方向型授業への転換である。一方、大学教育で変化したのは授業法ばかりでなく、授業外の学修を支援する活動や空間も変化している。

大学図書館を取り巻く学修環境

ICT化の影響として、書籍や雑誌を中心とする従来の図書館と電子情報を提供する電子図書館の機能を兼ね備えたハイブリット型図書館の出現がある。学術専門情報は、電子ジャーナル化やインターネットの普及でその流通が格段に容易になり、教員や学生の研究活動は、研究室や自宅でも充分展開可能となった。その結果、図書館サービスの主体は、学術研究支援から教育支援や学生の学修支援へと重点を移しつつある。こうした状況を背景に、大学図書館は、ネットワークを通じた情報収集そして書籍や雑誌を閲覧して知識を獲得する以外に、学生同士がお互いに議論が出来るグループ学修の場を提供する所謂、ラーニングコモンズへと展開する状況にある。新しい大学図書館の潮流は、グループワーク型や双方向型の授業運営等を効果的にサポートする役目を担うことになる。具体的には、図書館内に

学習支援のためのセンターの開設、レポート作成のライティング学習の支援活動そして学生の利便性を考慮したカフェの併設等である。すなわち、学生の変化を視野に入れ、学習意欲を喚起しつつ学生の心身の成長へ向けた活動の活性化に心を配る教員の努力（FD活動等）やラーニングコモンズを用意し、学生の行動ニーズに対応できる学修環境を整える図書館へと展開する必要がある。

文科省による平成24年度「学術情報基盤調査」の報告では、図書館を学生の主体的な学びの場として活用する大学が増えており、特にアクティブラーニングスペース（複数の学生が集まって、様々な情報資源を用いて学習を進めることができるスペース）を設置する図書館数は、この3年間で2倍に増加しており、平成24年5月現在では226館に達している。

学生協働による図書館サービス

学生キャリア形成教育支援やピアサポートによる図書館サービスの向上を目的として、図書館職員と学生が協働することにより、学生の意見やニーズを取り入れた図書館運営やサービスの改善を図る試みがなされている。学生は週及データやメタデータの入力作業、蔵書点検、資料の移動作業等の様々な図書館業務を通じて勤労観や職業観などのキャリア形成教育支援を受けることになる。特に、司書課程や司書資格修得希望学生には好評のようである。また、学生の学業を先輩学生が後輩学生を支援するピアサポート活動も図書館で行うことは有効である。

大学図書館選書のあり方

昨今の電子的な非来館型サービスが拡大していく中で、大学図書館はその提供資料で学生の読書ニーズを充足させて、来館型サービスも活性化させる必要がある。例えば、学生生活のための図書（留学資料、生活や趣味など）を集めたコーナー、教員の勤める本、新聞書評掲載図書やレポート・論文作成関連図書などのコーナーを設けるべきと考える。さらに、学生の図書館利用に最も影響力のあるのは教員からの課題や指導等であり、図書館による利用促進活動と同時に教員との協働が有効に思える。

しかし、こうした学生たちの学修活動を支える場としてのラーニングコモンズを備えた滞在型学修図書館は、その効用を生み出すための財政的基盤の強化なくして設立できない。そこには情報インフラの整備だけでなく、物理的・空間的なアナログの共有空間開発にかかる費用面での負担も小さくない。こうした投資を推進するには、学内に明確なビジョンと共有可能な理念が必要であり、図書館コンセプトのイノベーションが必要に思える。

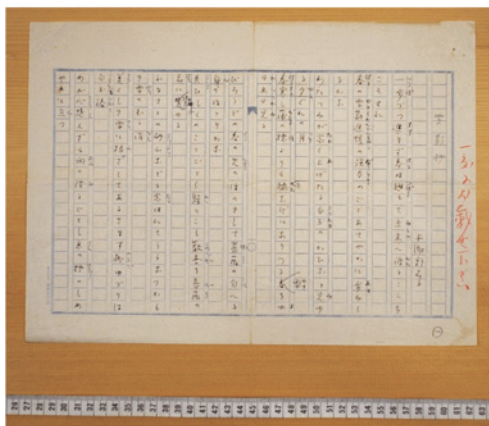
与謝野晶子 12 枚の自筆歌稿 (倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」) について

生活実践科学科 准教授 加藤 美奈子

近代文学者の初出資料・書簡等の「発見」が相次いで報じられている印象を受けます。今年1月、「薄田泣菫文庫」資料中の「与謝野晶子自筆歌稿」についても、新聞・テレビ・ラジオ等の各メディアで思いがけず大きく報道されました。この歌稿は、本学紀要『就実論叢』に掲載・紹介した資料です(「倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」」(第40号、2011年)、「倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」」(第41号、2012年)、「同「紫影抄」「萱の葉」他(一) 解題・図版・翻刻」(第42号、2013年))。『論叢』には、歌稿全点をカラー図版で掲載、本学図書館HP「就実学術成果リポジトリ」でも閲覧可能です。歌稿はいずれも縦約26cm×横約36cm、現在のB4版に相当し、400字詰め青野の原稿用紙で、「秋の薔薇」他3枚、「紫影抄」他5枚、「萱の葉」他4枚が重ねられた状態で保存されていました。これら12枚の原稿用紙に、計103首の

短歌がペン書きされています。大正2～10年頃に、主として薄田泣菫(本名・淳介、倉敷市連島出身)が勤めていた「大阪毎日新聞」(大正元年入社、大正8年学芸部長に就任)に掲載され、晶子の歌集『夏より秋へ』、『朱葉集』、『火の鳥』、『草の夢』(大正3～11年刊)等に所収されている短歌もあります。

特に注目を受けたのは、「未発表」とされる短歌です。晶子の歌稿は、「大阪毎日新聞」社の泣菫に宛てられ、新聞掲載を意識した「総ルビ」が施されていますが、紙面掲載にいたらず、歌集等にも所収されなかった短歌が含まれていると推測されます。調査した範囲では、今のところ16首の短歌にその可能性があり、「発見」として取材を受けました。が、晶子の自筆資料が「未発表」「新発見」とされることは、実は珍しいことではありません。晶子が生涯に詠んだ短歌の総数は、「3万首ないし5万首」とさえ言われています。与謝野寛(鉄幹)・晶子夫妻は特に晩年、招かれて全国を



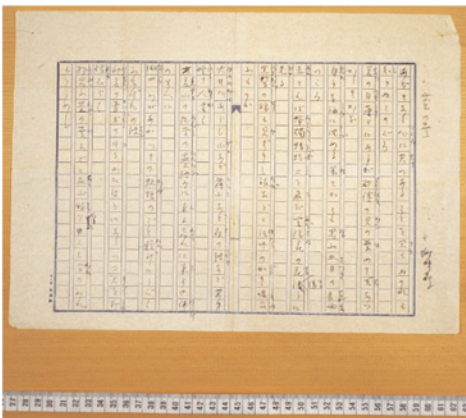
与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」
欄外に「一度にお載せ下さい」と朱書されている。原稿用紙は「神楽坂山田製」。

旅しており、各地での揮毫や書簡類が、全集・書簡集等に未収録である例は少なくないのです。近代文学者に関連する「発見」には、遺族や関係者に残されていた資料に加え、文芸誌以外の媒体や地方紙に掲載されるなどしたために、散逸しかけていた作品が見出された、という例もあります。与謝野晶子に限らず、近代文学者に関する資料は多岐にわたり、網羅的に収集することが困難な現状にあるのです。

「薄田泣菫文庫」に、この12枚の歌稿が残されていないければ、「未発表」とされる短歌も、おそらくは失われていたことでしょう。また、「自筆」資料には、「テキスト」としての意義にとどまらない価値があります。例えば、「与謝野晶子」の署名のある「紫影抄」と題された歌稿には、欄外に「一度にお載せ下さい」と大きく朱書してあります。原稿用紙2枚にわたる15首が、配列なども含め、まとまりある一つの作品として扱われることを晶子は希望していたのです。実際には、「大阪毎日新聞」に、3首ずつ5回に分けて掲載されました。歌人の作歌意識と、発表形態の齟齬についても考えさせられます。また、原稿

・初出・歌集では、作品の表記・表現の異同が生じます。それらを比較し、推敲の跡を捉える上でも、「自筆」資料は極めて重要です。加えて、晶子の使用した原稿用紙の種類(今回の歌稿では「神楽坂山田製」、「松屋製」)、ペンの筆致、文字のくずし方・変体仮名の書き癖など、現物資料だからこそ知り得ることの多さに圧倒される思いがします。

「薄田泣菫文庫」の大半は、1995年の阪神淡路大震災で家屋倒壊の下敷きとなり、遺族の方々が懸命に回収整理し、倉敷市に寄贈された貴重な資料群です。前号(「共翔」第20号、2012年)でも紹介しましたが、本学「吉備地方文化研究所」事業として、博物館学芸員課程の学生・卒業生有志とともに2010年度から3年余りをかけて「泣菫文庫」1700点余を調査・撮影、5500点余の画像データに収めることが出来ました。『論叢』掲載の拙稿は、その成果の一端を紹介したものです。近代以降の比較的「新しい」資料を「文化財」として扱い、後世に伝えていくことの重要性について、改めて認識を深めなくてはならないと考えています。



与謝野晶子自筆歌稿「菫の葉」
「物思ふ菫の葉などと並ぶ時今こし方の
われもうらめし」(十首目)が「未発表」
の可能性。原稿用紙は「松屋製」。

笑う男——山口昌男の訃報に接して

図書館長 山本 光久

2013年3月10日未明、文化人類学者の山口昌男氏が逝去された。享年81。

長いこと病床にあってのことだというが、迂闊にもそれを知らず、中沢新一氏や今福龍太氏による追悼文に接して吃驚したのが実情である。周知のように山口氏は文化人類学の目覚ましい革新を果たした存在で(新聞の訃報記事的なことを敢えて言えば、東京外国語大学のアジア・アフリカ研究所に30年ほど勤めもした)、『本の神話学』(1971)『文化と両義性』『道化の民俗学』(1975)『「敗者」の精神史』(大佛次郎賞)『「挫折」の昭和史』(1995)『内田魯庵山脈』(2001)等々と、その刺激的著書は枚挙に暇がない。

しかし、山口氏の死は、ひとり「文化人類学」という狭い一ディシプリンの碩学が亡くなったということのみに関わるものではない。

あの平凡社の『未開と文明』の解説(当時、この驀進する知の洪水に接したある仏文学者にして作家が、「このような「知の胃袋」が進行していたら、俺らの出る幕じゃないね」と半ば自嘲気味に語られていたことが想起される。ことほど左様にこの「知の胃袋」は瞠目すべきものであった)に端を発する氏の一連の著作は、自ら喧伝したように「知のトリックスター」「知のヘルメス」という名に違わぬ、牢固としたジャンルの垣根を果敢に越境するものであったことは大方の認めるところであり、ジャンル横断的な「知のネットワーク」なる言い方も、そもそも彼なしでは考えられな

い。その後、さまざまなレベルで「クロスオーバージャンル」とか「インターディシプナリ」とかいう言い方が回らぬ舌で喋々されたのはご案内の通りである。*1)

ここで、あらずもがなの注記を。先に「狭い専門ジャンル」を規定するために、「文化人類学者」ととりあえず言ったが、そもそも山口氏がそういう枠に収まりきれぬ存在であるのは明らかで、それは追悼文を寄せた人類学の中沢・文化人類学の今福両氏にしても同断である。いま、便宜上もっともらしい「肩書き」で両者と呼んだが、無論、山口氏の精神的な(掛け値なしの)愛弟子たる彼らは師同様、領域横断的な言論活動で夙に知られる言葉の真の意味で生産的な執筆者たちである。

山口氏自身は若干の韜晦もこめてトリックスターという用語を用いたわけだが、これは要するに「知の悪戯小僧」ということで、閉塞的な知的ジャンルの垣根を果敢に破って、孫悟空よろしくクロスオーバー的な「掟破り」、思いがけぬ知の相互浸透、活性化を試みたものである(ここは、そういうことを詳述する場ではないので、関心のある向きは現在進行中の筑摩書房版『山口昌男著作集』を参照されたい)。*2)

*

さてでは、山口昌男とは、どういう存在だったのか。「知の思いがけない遭遇」という意味でも、「図書館」

というありように密接に関わった知的活動を残した人なので、その知的活動の内実を多少なりと窺い知ってもらおうべく、試みに、中沢・今福両氏の追悼文から若干そのよすがとなるものを引いてみよう。(この得がたい「知の攪拌者」が、もっともらしい敬称の下にやりすごされてしまうのが口惜しいからでもある。)

まず、中沢の文言から。彼はデビュー当時「ニューアカデミズム」(通商ニューアカ)と呼ばれた一派の一人で、他にはたとえば、やたら売れた(フランスの構造主義・ポスト構造主義を解説した)『構造と力』(勁草書房)の著者・浅田彰がいる。

長い引用で恐縮だが、朝日新聞 3.12 の追悼文のイントロを引きたい。下手な説明をするより、これが「彼らの出会い」の「切実さ」を何よりも雄弁に物語っていると思うからだ。

「私たちの世代にとって、山口昌男はじつに偉大な解放者だった。1970年代、世の中ではきまじめであることが美德とされ、自分のしていることは正しいと誰もが思いたがっていた。その時代に山口昌男は知識人たちに向かって、そんなつまらない美德は捨てて、創造的な「いたずら者」になれ、と呼びかけたのである。」

さきほどから見え隠れに出ている、この「いたずら者」なる言い方には若干の補足が必要だろうか。このトリック・スター=いたずら者とは、この少し先で、「哲学にかかわって知的世界の前線を開く」と中沢自身言っているように、伝統的というよりは在来的な「哲学」の「常に自らが真理を語りうる」という認識の閉域を

食い破るべく、哲学=形而上学という牢固たる認識に関わる。この囲い込み構造に疑念を呈したのが、ほかならぬフッサールを始めとしてハイデgger、サルトル、レヴィナス、ブランショ、さらには論理哲学者ヴィトゲンシュタイン等々という多くの思想家・文学者であるのは今更言うをまたない。*3) 要するに、「硬直した知」ならぬ知を後生大事に金庫番のように守っている者たちへの留保抜きの「笑い」を放つのがトリック・スターである。

「とにかくよく笑う人だった。とりわけアカデミズムの権威などを前にすると……」と中沢の同じ追悼文中にある。すなわち、笑いの批評性ということであり、これはシェイクスピア劇に類出する道化を考えればよくわかる(あるいは、狂言における太郎冠者・次郎冠者を参照)。

*

ここで、今福の文言に移ろう。

「学ぶことを真摯に求める者であれば誰にたいしても、彼の知の懐はつねに平等に無条件に開かれた。深く遊ぶことを愉しもうとする者であれば、彼はともに遊ぶ祝祭的な場をたちどころに用意した」(今福、読売新聞 2013/3/12)。

これは、どういうことか。

かつてヨハン・ホイジンガはその『中世の秋』(中央公論社)で、「遊ぶ人(=ホモ・ルーデンス)」を強調したことがあるが(これはニーチェにも遡る)、これは今更ながら言えば、「遊び=知=笑い」の密接な関係を語って余りある。

話をやや横にふれば、闊達なる精

神の花田清輝はその『復興期の精神』を始めとして、生涯何を語ったのだろうか。人をけむに巻く韜晦をこととしつつ（これは往時官憲の目をも欺いた）、常に「転形期」の生き生きとした精神のありようを説いた花田は、紛れもなく山口氏の精神的系譜の先駆けである。今更、鶴見俊輔の解説を引き合いに出すまでもあるまい。

今福に戻ろう。「思いがけない出遣い、それは山口昌男の書庫のなかの意外な書物たちが隣り合って作りあげる、わくわくさせる未知の宇宙でした」（今福の弔辞による）。

単なる「学知」ではない。たまたま訪れた「師」の書庫を目にした者の豊穡なる出遣い。「出遣い」とは、すべて、そうありたいもの。その時は何気なくやり過ごしていたものが、時を経て、時限爆弾のようにその人間の中でいつか炸裂する……。そういう出遣いを信じたい。

中沢がさらに言う。彼にとってまさにモーツァルトの如き存在であった山口氏が言った——「サリエリにはなるなよ」。これは、わかる人にはわかるだろう。至言である。

最後に。

葬儀の際、妻のふさ子さんが言った。「主人の足に羽をつけました」。無論、この羽は、知の神ヘルメスの羽である。ちなみに、ヘルメスはまた泥棒の神でもあった。知と泥棒という意想外の二焦点。この楕円の思考にこそ、知の秘密がある。*4)

*1) 大方の追悼文が異口同音に口にしているのは、山口氏の自由闊達な知的精神である。ここでは東京外国語大学HPの「人類学的思考の沃野——追悼 山口昌男」から次の一節を引いておく。

「……もっとも初期に書かれた『本の神話学』には、厳格に構築された気むずかしくも見える「学問」を、より自由で闊達な「知」の軽やかな運動へと解き放つ方法が、いくつも秘められています。この本は、その後の山口人類学の方向性をも予見させる高らかなる宣言文でもありました。」

*2) 気鋭の「文化人類学者」というか面白い「書き手」としてデビューしたところの今福氏が筆者にかつて語ったことをここで敢えて開陳すると、「当時の指導教授がね、「おまえ、そんなことやっていると「学会」で生き残れないぞ」で言ったんですよ。ナルホド。若き日の今福氏は、当時の「文化人類学」のシバリを軽々と無視して、ラテン・アメリカ世界を気ままに「放浪」していたのである。この「放浪」の意味をこそ学ぶべきだろう。ちなみに、このあたりの彼の成果は『荒野のロマネスク』（筑摩書房）に結実していて、当時ナナハンを転がしていたオンナノコがこれを読み、「すっごくイイ!」と言ったのを仄聞している。「知」とは、そういうものではあるまいかと感じたことではある。

*3) ご案内の向きには屋上屋を架す弊があるが、さらには、J・ジョイス、ブルースト、ベケット、カルヴィーノ、（今やベストセラー作家の）ウンベルト・エーコその他等々を付け加える必要があるか。

*4) 怪しむ向きは、まずは花田清輝『復興期の精神』を参照のこと。

花田の『復興期の精神』は、これを要するに全編、円とは違って焦点が二つある楕円を思考のモデルにして、一義的な思考ならぬ思考の愚を批判し笑ったものだが、その変幻自在な文体の綾（文章とはそもそもそういうものだが）に幻惑されてというか目を白黒させて、さしもの官憲も何のことやらわからず検閲を免れたという曰くつきの書。

戦後、この書に「笑う男——アリストファネス」の章を追加したのが現行の版本だが、花田自身は、あるいは余計だったかなとももらしたという。いづれにせよ、「笑い」と「批評性」と「真の学知」とは無縁のものではないという、すぐれて山口昌男的なエピソードではある。



マーク・トウェイン
『トム・ソーヤーの冒険』 (新潮文庫)

誰もが一度は聞いたことのある物語ではないでしょうか。

主人公トムは、いたずら好きな腕白少年で、ある日、友人たちと共に冒険に行くことにしました。

様々な困難を乗り越え、トムの成長を感じるこの出来る1冊です。

今回ご紹介した本は日本語訳の本ですが、大学図書館には英語の本も所蔵されているので英語の本に挑戦してみるのもオススメです。

主人公トムと一緒に冒険の世界へと出かけませんか。

(人文科学部 実践英語学科4年 筒井博之)



パール・S・バック『大地』 (河出書房)

人から勤められなければあまり読もうと思わないであろう程、古くて分厚い本である。中国の安徽省(あんきしょう)に貧しい農家の息子として生まれた王龍という男の一生を描いた物語である。彼は根っからの農民で、自分の土地を愛し、作物に手をかけた結果、不作の年にも苦しまない程の財産を手に入れた。今まで何の娯楽もなく働いてきた王龍だが多くの財産を得て、徐々に良くない方向へ向かう。

ドラマのような波乱万丈な人生だが、だれもが経験するのでは、と思わせるリアルさも感じられる。余裕を得て欲の赴くままに流される王龍を自分に置き換えたとき、自分は正しい道を選ぶことができるだろうか。読み終えた後、各々に感じる問いを是非自問自答していただきたい。

(人文科学部 表現文化学科3年 西垣優衣)



紫月香帆『あおいろ 色風水写真集』
(パイ インターナショナル)

『あおいろ』には青色、蒼色、藍色、白色、緑色と沢山の色が詰まっている一冊です。花や木々、空にオーロラなどの自然から始まり、小物系があり、最後は海と夜空の写真で締めくくられています。

緑は青色ではないと思った人がいるだろうか。古来では青と緑の区別はなく、同じ「あお」と認識されていた。その「あお」には癒し、健康運、休息、人の心を惹きつけ、落ちつかせるなどといった運氣を変えるエネルギーをもっています。

迫力ある写真と岡山真子さんの詩は頑張る力を与えてくれます。一度はこの不思議な本を開いて見てください。

(人文科学部 表現文化学科2年 榎本ゆめ)



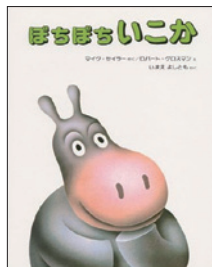
『天使になったペットたち (犬編)』
(大和書房)

ペットを飼っていると必ず訪れる「別れ」の時。その時飼い主はどんな気持ちになるだろうか。感謝、それとも後悔の気持ちだろうか。本書はそんなペットとの「別れ」を経験した飼い主達の様々な「想い」を集めたものとなっている。

飼い主の想いを48篇収載している本書の内容は、決してペットに対して感謝の言葉を綴ったものばかりではない。最後を看取ってあげられなかった後悔や懺悔の気持ち等、残された飼い主達の複雑で深い想いが詰め込まれた内容だ。

ペットを飼っている方もいない方にも、本書をぜひ手に取って一読してもらいたい。そして「別れ」を通して刻まれた思い出やその想いが、少しでもあなたに届くことを願っている。

(人文科学部 表現文化学科3年 野田恵)



マイク=セイラ作/ロバート=グロスマン
絵 いまえよしとも 訳

『ぼちぼちいこか』 (偕成社)

今回は何かを得るのに必死になって疲れてしまった時にお勧めしたい本を紹介します。関西弁のかばくんはいろんな仕事に挑戦しますが、その体の重さゆえにことごとく失敗します。その失敗姿は実にユーモラスで、自分なりに頑張ろうとするひたむきさに勇気をもらいます。

私は就活生になり、何枚も「お祈り」をもらいました。しかし、頑張るかばくんを見ると、世の中にはきっと自分の力を必要としている仕事がどこかにあるさ、と前向きになれる。たまにはのんびりしてもいい。かばくんと一緒に「ぼちぼちいこか」。

(人文科学部 表現文化学科4年 柴田歩実)



湊かなえ『花の鎖』 (文藝春秋)

ミステリーですが、読み終えると爽やかな感動がありました。梨花、美雪、紗月の三人の女性の物語が同時に進行していきます。それぞれが悩み、傷つくのですが、過去を乗り越えていく姿は素晴らしかったです。女の人は強い！花の鎖をたぐり寄せていくと真実が分かります。たくさんの登場人物が出てきますが、美味しそうなきんつばと花の記憶をキーワードに繋がりを見つけてください。

(ナクススドッグ)



横山秀夫『第三の時効』 (集英社)

F県警捜査一課強行犯係。3人の班長はF県警で歴代最強と呼ばれている。“笑わない青鬼”朽木、“公安崩れの冷血”楠見、“天性の捜査勘を持つ男”村瀬。

この3人が担当する事件を描くオムニバス小説。

今年の本屋大賞で2位をとった著者が初めて、捜査を担当する刑事を主役にした小説です。短編なので小説が苦手な人でも読みやすいと思うので、横山秀夫を未読の人はぜひ読んでみてください。

(ぼん太)



『おそうざいふう中国料理』 (暮しの手帖社)

レトロな模様の真っ赤な表紙にどこか懐かしい感じのする文字で書かれたタイトル。ちょっと見かけないタイプの料理本です。中国料理というと、火加減が難しい、調味料が高いなど、普段のごはんには少し面倒な印象があるかもしれませんが、この本ではいつも家にある食材で簡単に作ることができて、ちょっと本格的で気の利いた、美味しい中国料理がたくさん載っています。作り方も写真付きで説明がとてもわかりやすく、大らかな雰囲気の本なので、料理の苦手な人にも、男の子にも女の子にもおすすめです。誰かのために、自分のために、料理をするのが楽しくなる1冊。まずは手にとって、眺めてみてください。今日の晩御飯に食べたいものがいっぱいみつかるはずですよ。

(サワラ)



高村光太郎『智恵子抄』（新潮文庫）

この本は、筆者の高村光太郎が妻である智恵子さんへの一途な思いを綴った詩集です。明治の終わりに出会い、結婚をした幸せな時間。病におかされて狂っていく愛しい妻の姿。そして、死別してもなお募る彼女への思い。それらを表現したこの詩集は、二人が知り合ってから全生涯を貫く「稀有な愛の詩集」と言えるでしょう。

詩というジャンルは理解が難しいと言われますが、この作品は恋愛ものなので比較的とっつきやすいと思います。また『樹下の二人』や『レモン哀歌』などを国語の教科書で読んだ人もいないのではないのでしょうか。本には全部で四十七篇収録されていて、読めば読むほどその魅力に取りつかれます。あなたもこの本で詩にチャレンジしてみてください！

（おにぎり）



岩下宣子

『社会のマナーとしくみがわかるおとな事典』（講談社）

卒業年次生の方々は就職活動まただ中で、大変な苦勞をされていると思います。

努力が実り、就職が決まったとしても次に悩みの種となるのが、「社会のマナー」ではないでしょうか。そんな悩みを解決してくれるのがこの本です。イラストで具体例を示してくれているので、理解しやすい内容となっています。就職活動はまだの学生の方も、読んでおいて損はありません。

ただ、個人的にはワイシャツは毎日洗った方がいいと思います……。

（ヌートリア）



ロシア民話・トルストイ再話

『おおきなかぶ』（福音館書店）

先日、絵本コーナーで足を止め、手に取って懐かしんでいた絵本が「おおきなかぶ」。

幼稚園実習で子どもたちに慣れない読み聞かせをした絵本の一冊です。なかなか抜けない大きなかぶを、みんなで力を合わせて抜くという単純な物語ですが、抜く作業に人間のみならず、犬・猫・ネズミと、力のない動物が登場するのです。子どもたちの目が輝くのは、「うんとこしょ・どっこいしょ」の掛け声とともに、次の登場人物への期待感が高まる瞬間です。この単純な物語の中に、おおらかさ、力強さ、ユーモアが満ち溢れているが故、長く子どもたちに愛されるのかもしれない。（モモジリ）



雅姫『まいにちのお弁当』（扶桑社）

みなさん、毎日のランチはどんなものを食べていますか？ 学食？ コンビニ？ ママの手作り？ 自分でお弁当をつくる人はもちろん、買う派の人も読んで・見て楽しいお弁当本がこちら。レシピ集というより（もちろんレシピもあるよ）、モデルでもある著者のお弁当が、カラフルな写真で紹介。中でも著者の愛犬モグラちゃん（トイプードル）のお顔をモデルにしたキャラ弁がとってもカワイイ。

他にも「曲げわっぱ」のお弁当箱工房での制作風景や、おはし袋の作り方、お弁当に便利なお取り寄せ食材など、ふつうの料理本とはちょっとちがったおもしろい本です。

読み終わったあとはきっとあなたもお弁当が食べたくなるはず！ いや、作りたくなるはず！

（ハラペーニョ）

図書館では、書誌以外にもインターネット上で参考文献等の情報を検索することのできるツールを用意しています。
今回はその中のいくつかをご紹介します。レポート・卒業論文作成の時の参考資料の収集にお役立てください。(図書館ホームページよりご利用いただけます。)

* CiNii (論文情報ナビゲーター)

アクセス方法 図書館HP → MENU/学術情報ポータル → 全般/CiNii Articles

国立情報学研究所が提供する文献検索のデータベース。全分野にわたる約1,500万件の日本の学術論文情報が収録されています。

機関リポジトリ CiNii PDF- オープンアクセス CiNii Link1 等のアイコンのある論文はアイコンをクリックすると論文が画面上で確認できます。印刷可能です。(論文の確認は学内限定です。)



* 聞蔵Ⅱビジュアル (学内限定・同時アクセス数2)

アクセス方法 図書館HP → MENU/学術情報ポータル → 新聞記事/聞蔵Ⅱビジュアル

1945年から当日までの「朝日新聞」の全地域面を収録(沖縄を除く)しており全国各地の出来事が検索可能です。紙面イメージや切り抜きイメージも閲覧できます。キーワード検索だけでなく、日付を限定しての検索も可能。「週刊朝日」「AERA」の記事も収録されており新聞と同時に検索できます。



*ブリタニカエンサイクロペディア (学内限定)

アクセス方法 図書館IP → MENU/学術情報ポータル → 全般/ブリタニカエンサイクロペディア

日本語の『ブリタニカ国際大百科事典』と英語の『Encyclopædia Britannica』をベースとしたポータルサイトです。事件・人物・言葉の意味等の検索に便利!! 論文・レポート作成時には、出典表示機能が役立ちます。

【日本語検索画面】

【英語検索画面】

日本語検索画面の「ブリタニカ・オンライン (英語)」をクリックすると英語検索画面に変わります。

ベケット劇公演を通訳して

実践英語学科 講師 武部 好子

極寒の中、東京の路地裏にある小劇場に入ると、そこには様々な「声」が飛び交っていた。アイルランド人男性演出家が指示を出す声、俳優たちが発声練習をする声、照明を担当する日本人スタッフの声、受付を準備する女性の声、そして上演間近になると老若男女の観客の声——。小さな空間にあらゆる種類の声が行き交っていた。

2013年2月16日(土)および17日(日)東京・両国シアターX(カイ)にて上演されたアイルランドの劇団Mouth on Fireによるサミュエル・ベケット(Samuel Beckett, 1906-1989)の公演“Before Vanishing…”『消滅するまえに…』に、通訳として参画した。アイルランド人の演出家と女優が2010年に創設したこのMouth on Fireという劇団は、ベケットの作品を人びとに身近に感じてもらい、精確に作者の意図に敬意を払いつつも創造的な舞台を提供することを目的としている。これまで、ダブリン、ゴールウェイ、デリーといったアイルランドの都市の劇場をはじめ、ベケット研究者に向けてイギリスのサウサンプトン大学で、アート・ギャラリーでも上演してきた。劇団とは、2011年8月の国際演劇学会(於：大阪大学)や2012年9月のサミュエル・ベケット学会(於：英国サウサンプトン大学)から既知の間柄であり、互いに信頼感を持って、今回の仕事に臨んだ。

サミュエル・ベケットは、アイルランド出身の劇作家であり、英語とフ

ランス語で作品を書いた。1969年に戯曲『ゴドーを待ちながら』(*Waiting for Godot*, 1952)でノーベル文学賞を受賞。日本でも翻訳・上演されてきたが、とりわけベケット後期の戯曲は、あまり知られていない。更に、アイルランドの劇団が英語で上演するのは、日本では非常に稀である。今回、この劇団が、ベケット自身が残した演出ノートに基づいて、4つの後期の戯曲を「演劇詩」として創出した。上演された4つの作品『オハイオ即興劇』(*Ohio Impromptu*, 1981)、『あしおと』(*Footfalls*, 1976)『あのとき』(*That Time*, 1976)および『行ったり来たり』(*Come and Go*, 1967)について、演出家は、その視覚的イメージは色を廃したレンブラントやフェルメールの絵に酷似している、と説明した。



(『行ったり来たり』 *Come and Go*
於：東京・両国シアターX)

上演前のプレトークでは、演出家が、上演作品の文学的・学問的背景について、シェイクスピア、T・S・エリオット、ワーズワース等と結びつけて、英語で説明し、私は観客に

向けて日本語に逐次通訳を行った。ここで普段の通訳の仕事と全く異なる点があった。通常、通訳は黒子的存在であるのに対して、今回は、演出家が舞台の左端に、通訳である私は舞台の右端にそれぞれ立ち、スポットライトが我々二人の間を行き来したのだ。この特別な演出方法によって、通訳も、演者の一人として、スポットライトを浴びたのである。

公演後、観客と劇団の間でアフターミーティングが行われ、観客からの質問(日本語)と、劇団からの回答(英語)を私が通訳し、劇団と観客との間で、示唆に富むディスカッションが繰り広げられた。通常、上演後のポストトークは、劇団関係者は舞台上の椅子に座り、観客は着席したままの状態で行われ、舞台と観客席との間には、見えないバリアが敷かれている。ところが、今回のアフターミーティングは、劇場のロビーで行われ、劇団と観客は同じフロアに会し、意見を交換し合い、そこに境界線は皆無だった。このようなスタイルで行うアフターミーティングは、シアターXでは恒例となっている。冒頭で述べたように、劇場に入った瞬間、私が耳にしたあらゆる人種の雑多な声が、このロビーに集結していた。できるだけ多くの声を通訳できればと願い参画した。ベケットと同じ年に生まれた舞踏家、大野一雄氏(1906-2010、生前、ベケット後期演劇『ロッカバイ』*Rockaby* 1981を能役者と共に舞った)のご子息大野慶人氏から手が挙がり、同時期に生きた者の戦争体験を語った。また、ベケット後期作品『クワッド』(*Quad*, 1984)を2006年11月に東京の鏡仙会能楽堂で演出された笠

井賢一氏の手も挙がり、ベケット後期演劇を能楽と結びつけてお話された。著名な芸術家たちだけではない。「ベケットについてあまり知りませんが、今日は来てよかったです。ベケットの作品は、死をテーマにしているようですが、最近、出産を経験した私にも何故か身近に感じました」と若い女性が発言すると、劇団の演出家は、「それでは、ベケットの一番短い作品『息』(*Breath*, 1969)を見てください。これは、オギャーという産声が数秒間、ガラクタの中から聞こえてくるだけの作品です」と返した。



(『オハイオ即興劇』*Ohio Impromptu*
於：東京・両国シアター X)

死と生、言葉と沈黙、光と闇、自己と他者——。一見、相反するモチーフを同一線上に描くベケット独特の芸術作品を見に劇場に足を運ばれた様々な立場の十人十色の声をできるだけ忠実に届けることができただろうか——。通訳とは黒子的存在であり、日頃、通訳する私自身の声には色をつけないように心掛けているが、今回、通訳にもスポットライトが当たったため、通訳する声にも、少々、色がついてしまったかもしれない。

【一緒に快適空間をつくろう】



図書館に来る時は、必ず学生証を持参して下さい。



図書館では静かにしましょう。(3階に上がる階段の声は館内に響きます。イヤホンからの音もれにも気をつけて下さいね。)



携帯電話はマナーモードにしてください。



図書館内は飲食厳禁です。(飲み物のみブレイクコーナーでOKです。)



手に取った本は元の場所に戻しましょう。(分からないときは各階の返却台に置くか、カウンターに持ってきてくださいね)

【図書館とマナーについて】

図書館には、友達と一緒にいきますか？ それとも一人ですか？ 決まった時間に行きますか？ それともぶらりと立ち寄っていますか？ ひとりひとり目的は違っていますが、図書館という同じ空間で同じ時を過ごしています。だから、マナーがあるのです。たとえば、集中して勉強をしたい人がいるのに、他の人の話し声がそれを阻んでしまうのです。その気持ちにつきましたか？ 自分のためだけではなく、みんなのために、共に快適空間をつくっていきませんか。

第4回図書館セミナー 図書館で地域をまなぶ

笠岡諸島大飛鳥遺跡の意義 ~古代瀬戸内の海上交通~

笠岡諸島の大飛鳥から出土した奈良・平安時代の品々は何を物語るのか？
そして、今ではほとんど見られなくなった「大飛鳥の砂嘴」とは？

開催日：2013年10月5日(土)

時 間：13:30~15:30

報告者：笠岡市教育委員会 生涯学習課主任学芸員 安東康宏氏

申し込みは電話かFAXまたはE-mail: lib@shujitsu.ac.jpまで

お知らせ

共翔 第21号

編集・発行

就実大学・就実短期大学図書館

平成25年7月15日発行

〒703-8258 岡山市中区西川原1-5-22 TEL(086)271-8134 FAX(086)271-8275

ホームページ <http://www.shujitsu.ac.jp/category/toshokan>

※館報の題字は押谷善一郎名誉教授の書によるものです。